

レヴォン・テル・ペトロシアン 『アルメニアの古い翻訳文学』 (続き)

● 戸 田 聡

本稿は、跡見学園女子大学『人文学フォーラム』第11号に前半が掲載された上掲書日本語訳の後半部分に当たる。諸般の事情により分割掲載となったことをお断わりしておきたい。

* * *

現存する諸書

古代及び中世のアルメニア語の翻訳の意義は、アルメニア学的な考慮にのみ限られるわけではなく、世界規模の文化の研究の観点から見ても、それら翻訳は大きな価値を示している。なぜなら、ギリシアやシリアの文学の数多くの著作(そのもともとの文章が失われているところの)は、主としてそれら [アルメニア語への] 翻訳のおかげで、現代の文明の所有となったからである。

この意味で最初に言及しなければならないのは、カイサリアのエウセビオス (339年没) の、2つの部分から成る『年代記』(クロニコン) であり、これは5世紀のアルメニア語訳によって我々に伝わっている。この著作は、人類の先史から4世紀の初めに至るまでの大きな期間をカバーしており、アッシリア人やバビロニア人やエジプト人やヘブル人やメディア人やペルシア人の諸々の王国や、マケドニアやセレウコスやプトレマイオスの諸々の王朝や、ローマ帝国や、そして多数の他の王国の諸段階や諸国家の、年代を順次説明している。この著作の第1の部分(『史的年代記述』)は様々な状況の史的説明を示しており、第2の部分(『年代の規準』)——ヒエロニムスが行なったラテン語訳でも知られている——は同じ諸状況の同時並行的な表を示している。エウセビオスの『年代記』は今日の学問のために大きな価値を呈している——4世紀の歴史学のアプローチの注目すべき実現として [価値がある] だけでなく、その引用のおかげで、Berosus や Alexander Polyhistor やその他の人々といった旧世界の有名な著作家たちの、史的著作の若干の部分が我々のもに伝わっているのである。『年代記』のアルメニア語批判本文は、ラテン語対訳と、ギリシアの後代の著作家たちのもとの保存された断片の再掲とを伴う形で、ムクルティチュ・アヴゲリアンが1818年に刊行した。幸運にも唯一の写本の書写(現在この写本はマシュトツの名^{マテナグラ}の写本館に保存されている)によって、エウセビオスの『クロニコン』のアルメニア語本文は我々に伝わっている、ということ指摘するのは興味深い。もし、上述の唯一の写本が我々に伝わっていなければ、歴史記述に関するこの貴重な著作は今日散逸していただろう。5世紀の20年代にマシュトツの注文によって、カイサリアのエウセビオスのもう1つの著作『教会史』がシリア語からアルメニア語に翻訳されており、これもまた、そのシリア語原文のうち広範な部分が欠如しており、その欠如している部分がアルメニア語訳のおかげで保存されているという状況を我々が念頭に置かなければ、同様に重要な学問的価値を呈している [と言える]。

アルメニアの翻訳文学の多くの重要な著作の中には、ルグドゥヌムのエイレナイオス (203年ごろ没) の『使徒的使信の証明』という著作もある。この著作は今世紀 [20世紀] 初めに発見さ

れ、学問的世界の側で、教父文学の分野におけるその年の最も重要な発見として評価され、1907年に刊行された。この例外的な評価があったのは、エイレナイオスのこの著作と別の有名な著作『異端反駁』のギリシア語原文が失われている、ということのためである。5巻から成っているこの後者〔『異端反駁』〕は、古いラテン語訳によって保存されている。『異端論駁』という著作のアルメニア語訳のうち、我々に伝わっているのは第四及び第五巻だけであり、エイレナイオスの文学的遺産の研究のために、それらは同様に重要な意義を有している。最近フランスのアルメニア学者シャルル・ルヌーが、上述の著作の中から成る相当量の抜粋を、或るアルメニアの写本の中に発見して刊行しており、その抜粋には、『異端反駁』という著作の最初の3巻からも数多くの本文の引用がある。そのことが示しているのは、往時にはこの著作も、同様に全体がアルメニア語に翻訳されていたのだ、ということである。エイレナイオスの諸著作のアルメニア語版は、それらが呈している大きな文学的価値のおかげで、ヨーロッパの側で例えばドイツ語、フランス語、ロシア語、英語その他の諸言語によって翻訳され刊行されている。

1世紀の有名な哲学者にして神学者であるヘブル人（或いはアレクサンドリア人）フィロンの文学的遺産の相当部分も、同様にアルメニア語訳のおかげだけで保存されている。アルメニア語で知られているフィロンの15の著作のうち、8つのギリシア語原文が失われている、ということ指摘するだけで充分である。それらは、創世記及び出エジプト記の註解、摂理に当てられた2つの論考、また、『諸々の動物について』、『サムソンについて』、『ヨナについて』、そして『神について』といった講話である。最後の3つの著作の真正性は文献学の側から疑問視されているとはいえ、それにもかかわらず研究者たちの見解では、ギリシア・ヘブル的環境の顕著な産物として、それらは大きな価値を呈している。フィロンの著作の一連のアルメニア語版〔の中〕で、その意義の点で傑出しているのは創世記及び出エジプト記の註解であり、この理由によっても、それらはラテン語、英語、フランス語の翻訳によって遇されている。

アルメニアの翻訳文学の中で、量の点で、また写本の書写の数の点で、聖書の次に第1位を占めているのは、ビザンツの作家ヨアンネス・クリュソストモス（407年没）の文学的遺産であり、その主要な部分は同様にアルメニア語訳だけによって知られている。教父文学の最も新しい文献目録の1つの中では、ヨアンネス・クリュソストモスに属するか彼に帰せられるかそのような著作が43あると指摘されており、それらの大部分は依然未刊行である。これまでのところ、それらのうち13だけが刊行されている。クリュソストモスの一連のアルメニア語訳〔の中〕で、学問的サークルの注意を得てきたのは特にイザヤ書の註解であり、そのギリシア語原文のうち保存されているのは最初の8章だけで、残る56章の唯一の証拠を示しているのがアルメニア語版なのである。クリュソストモスのアルメニア語版は、前世紀〔19世紀〕の末にラテン語に翻訳され、学問的流通の中に入っている。

アルメニア語訳のおかげで、ビザンツの註解文学の別の重要な著作の1つであるエルサレムのヘシュキオス（450年以降に没）の『ヨブ記註解』も救われている。伝わっている情報によると、ヘシュキオスは聖書の全文書について〔註解を〕書いており、しかしながら、それらのうちわずかなものしか我々に伝わっていない。『ヨブ記註解』のアルメニア語版は不完全な写本の基礎の上に刊行されているが、マシュトツの名の写本館^{マテナグラ}にはヘシュキオスの著作のより完全な書写が保存されており、それらの比較によって、現在アルメニア語版の新たな批判的〔校訂版〕刊行が準備されている。最近、エルサレムのヘシュキオスの『聖ヨハネについて』という論考のアルメニア語訳も発見された。これのギリシア語原文は、同様に散逸している。

これまでのところ、猫背^{アイゴルロス}のティモテオス（477年没）の『カルケドン会議の決定に対する反論』

という著作のギリシア語底本もまた、発見されていない。5世紀のキリスト教内部の教義闘争のこの貴重な著作はアルメニア語訳とシリア語訳によって我々に伝わっている。しかしながら、アルメニア語版とシリア語版を比較することによって、ベルギーの文献学者J・ルボン¹は、後者[シリア語版]はティモテオスの著作の改変され縮約された版を表しており、他方アルメニア語訳の中ではそれは、その全体において、かつもともとの状態において、保存されている、という結論に到達した。猫背のティモテオスの『反論』はアルメニアの教義的文献に対して相当の影響を有した。7世紀初頭、カトリコス²のコミタスはそれに類似する形で『クニク・ハヴァトイ』[訳すと「信仰の封印」]という集成を編んでおり、他方、13世紀にはヴェルダン・アイゲクツィが『アルマト・ハヴァトイ』[訳すと「信仰の根」]という集成を編んでいる。反カルケドンの性格のこれら著作は、アルメニアの教会の独立とアルメニア人民の国民的個性とのために推し進められた闘争の中で、重要な役割を果たした。

アルメニアの翻訳は、アレクサンドリアのアタナシオス(295—373年)やガバラのセウエリアノス(408年以降に没)やエメサのエウセビオス(359年ごろ没)及びその他の人々といった、教父文学のその他の優れた代表的存在たちの、創造的な遺産の補完という作業の中で、或る程度の益をもたらしてもいる。アルメニア語訳のおかげで、アレクサンドリアのアタナシオスの11の、ガバラのセウエリアノスの10の、そしてエメサのエウセビオスの9つの、著作が保存されている、ということ指摘するだけで充分である。特に、ほぼ完全に我々に伝わっているエメサのエウセビオスの『[聖書の初めの]八書註解』のアルメニア語訳が最近刊行されており、これに対して、註解のギリシア語原文からは、中世の引用の中で断片だけが保存されている。また、アテネのアリステイデスやカイサリアのバシレイオスやポストラのヒッポリュトスやポストラのアンティパトロスやその他の教会著作家たちの著作のアルメニア語訳(それらのギリシア語原文は同様に散逸している)を指摘することも可能である。

しかしながら、教父文学の研究の分野における最大の貢献は、シリア人エフレム(373年没)の著作の古アルメニア語訳の中に見いだされる。それらのうちの多くのシリア語原文は我々に伝わっていない。それら[アルメニア語訳]は、『51の讃歌集成』、『ニコメディアの16の哀歌』、『パウロの書簡の註解』、『タティアノスの調和福音書(ディアテッサロン)の註解』の大部分、創世記、出エジプト記、民数記、レビ記、申命記、ヨシュア記、士師記、列王記[サムエル記上下と列王記上下の両方を指す]、パラリポメナといった諸書の短い註解、ヨブ記や使徒言行録の註解の小片、また例えば多くの講話、祈り、勧めである。1836年から始まって、エフレムの著作のアルメニア語訳の4巻本の集成の刊行以降、上述の諸々の文学作品はヨーロッパの文献学の注目の対象となった。[本書が刊行された1984年までに]過ぎ去った1世紀半の間に数多くの研究がそれらについて行なわれ、新たな批判的[校訂版]刊行が行なわれ、ラテン語へ、或いは近代のヨーロッパ諸語へ、翻訳がなされた。こうして『タティアノスの調和福音書の註解』は2度の刊行(1836年と1953年)を有しており、それは2度ラテン語に翻訳され(1876年と1954年)、そして1度フランス語に翻訳されている(1966年)。1836年の刊行の基礎の上に、『パウロの書簡の註解』もまたラテン語に翻訳されている(1893年)。使徒言行録の註解からは、ラテン語訳及び英訳が行なわれている(1926年)。『讃歌集成』は3度刊行され(1934年、1957年、1966年)、最近のではラテン語対訳が伴っている。『ニコメディアの哀歌』は2つの刊行を有しており(1930年と1975年)、そのうちの2つ目はフランス語訳を伴ってである。

エフレムの著作のアルメニア語訳に対して示されたこのような関心は、2つの重要な状況によって説明される。第1に、エフレムは東方の教父学の最も偉大な著者を成しており、その教えは、

ギリシアの影響を免れてきた土着のアラム語圏キリスト教のイデオロギーを示しているのである。第2に、彼の諸々の著作は、聖書諸文書の、特に新約聖書の、研究のために大きな意義を有する。なぜならそれらは、ギリシア語及びシリア語で〔行なわれて〕我々に伝わった最古の書写よりも前に、創られたものだからである。

シリア人エフレムの諸々の著作と並んで、シリアの文学の多くの著作もまた、アルメニア語訳のおかげで救われて我々に伝わっている。例えばエデッサのアイタッラハーの『牧会書簡』、アミダのゼノビオスの講話、『東方の殉教者たち』の序文の大部分、マイペルカトのマールーターの伝記、ヤズダンドゥフトとバルディシヨの殉教伝、シリア人ミカエルの『年代記』の前書き、助祭ナナの『ヨハネ註解』（これはたぶんアラビア語版からアルメニア語に翻訳された）である。

しかしながら、アルメニアの翻訳の学問的価値は教会文学の分野にだけ限られるわけではない。アルメニア語で知られている一連の哲学的・法学的著作〔の中〕で、そのオリジナルが我々に伝わっていないといった諸々のものが同様に存在する。1949年に哲学者ゼノンの『自然本性について』という、新たに知られるようになった著作が、アルメニア語訳で刊行された。その著者の問題は、これまでのところ文献学の中では満足の行く解決を見いだしていない。もし、この著作が哲学のストア学派の創設者キティウムのゼノン（紀元前336—264年ごろ）の筆になるものだという、研究者たちの蓋然的な推測が証明されれば、アルメニア語版は、著者の世界観と、特にストア学派の教説の解明の観点から、大きな意義を獲得しうるだろう。なぜなら、現代の学問はこれまでのところ、ギリシアの作家たちのもとで保存された引用によってのみ、ゼノンの著作に親しんでいるからである。

ヘルメス・トリスメギストスに帰せられる『アスクレピオスに宛てた諸定義』という著作のアルメニア語訳が、1956年に刊行された。そのギリシア語底本は、これまた散逸したとみなされている。宗教的・哲学的性格を有するこの著作は、紀元後3世紀にエジプトで普及を見たヘルメス文学の残滓の1つだとされており、この文学について在った学問的認識を相当増し加えるだろう。それらのおかげで、既にこのアルメニア語著作は、ヨーロッパの文献学者の注意を得てきている。『アスクレピオスに宛てた諸定義』という著作は学問的目的によってアルメニア語から翻訳され、ロシア語及びフランス語で刊行されている。

『アンティオキアの^{アシーズ}法廷』のアルメニア語訳（この翻訳は13世紀中葉に^{スバラベド}将軍スンバト〔或いはセンパド〕によって行なわれた）もまた、現代の学問のために重要な意義を有する。この著作の発見に至るまでは、エルサレムの法書の存在だけが知られていた（東方に創設された十字軍戦士たちの諸国家は、同様に自分たちの法書を持っているはずだ、ということが推測されてはいたが）。フランス語対訳を伴って1876年に刊行されたアンティオキアの法のアルメニア語版は、この推測を全く正しいものとし、同時に、十字軍戦士たちの諸国家の公的秩序の研究のために追加的な素材を提供した。アンティオキアの法書は、キリキアのアルメニア王国の歴史の様々な問題の解明という観点からもまた、若干の関心を示している。なぜなら、^{スバラベド}将軍スンバトの証言によれば、この法書は実際的には領域内でも適用されたからである。

世界規模のアルメニアの写本の中では、学者の世界でなお知られていない他の翻訳著作もまた保存されている。最近になってなお、新たな2つの翻訳著作が発見され刊行された（それらのオリジナルは現在知られていない）。それらは、コンスタンティノーブルのエウテュキオス（582年没）の教義的著作と、シリア人ファラジュの『馬の医書』という獣医学の著作である。

文献学的研究のためには、オリジナルが我々に伝わっていないそれら翻訳だけでなく、オリジナルで知られている〔もののアルメニア語〕翻訳も、同様に他のいくつかの翻訳によって知られ

ている [もののアルメニア語] 翻訳も、大きな価値を呈している、ということをつけ加えることが必要である。このような状況では、アルメニア語訳は、それらの底本の本文上の歪みの修正に貢献するのである。例えば、はや19世紀初頭にサン・マルタンは、アリストテレスとプラトンの著作のギリシア語版とアルメニア語版を比較して、後者 [アルメニア語版] は全くの正確さを以て翻訳されており、「これら哲学者たちの文章の数多くの章句の意味を修正する仕事に役立ちうる」という結論に達した。次いでイギリスのアルメニア学者フレデリック・コニーベアは、アリストテレスとポルフェリオスの著作の本文検討の基礎の上に、古さ、正確さ、そして我々に伝わった本文の無謬性という、アルメニア語訳の3つの重要な特徴を出発点とすることによって、事実上この結論の正確さに対して証拠を与えた。上述の諸著作だけでなく他のアルメニア語訳の大部分もまた、この3つの不可欠な条件に全く呼応しており、したがって、それら翻訳も同様に、ギリシア語・シリア語原文の正確さを検証する仕事のために有益たりうるだろう。

諸々の芸術的翻訳

これまでの諸章を読むことから、中世の翻訳は読者の宗教的・学問的・教育的必要に満足を与えることのためにのみ行なわれたという一面的な印象が、たぶん創られただろう。キリスト教的メンタリティーが支配の諸条件の中でいったん一般的となった一方で、アルメニアでは、純粋に芸術的な文学に関する関心もまた決して已まなかった。アルメニアの文学の夜明けの最初の日々には、キリスト教的文学の芸術的な (聖人伝、宗教的詩文その他) 多数の著作だけでなく、全体として世俗的な精神にあふれた著作もまた、アルメニア語に翻訳された。それら著作の数は、アルメニアの文化的世俗化の全般的な傾向性に影響されて、特に10~13世紀以降に増大し始めている。

芸術的著作の翻訳は、その内容の点で、[また] 本文史的・写本的な伝承の点で、宗教的・科学教育的な性格を有する翻訳とは、或る程度異なっている。一般に後者が、限られた数だけ行なわれた書写によって我々に伝わっているとすれば、しかしながら、芸術的な著作は、数十またさらに数百の写本によって保存されている。この現象は、それらの普及と人気を物語る証言である。中世には宗教的・科学教育的な翻訳の本文はカノンのとみなされ、その理由により、ふつうそれらは不変的な仕方、かつ非常に良心を以て、書写されており、これに対して芸術的著作は、数多くの変化と分岐化とを蒙っている。そしてその理由により、同じ本文が多数の独立した版及び編集となっており、それら [多数の版及び編集] は地方的・国民的メンタリティーの精神を表現している。

世俗的な芸術的著作のアルメニア語訳の列において、その古さの点で、及び歴史文化的な意義の点で、第1位を占めるのは、オリュントスのカリステネスの筆に帰せられる『マケドニアのアレクサンドロスの歴史』である。文献学者たちの見解では、翻訳は5世紀半ばに、アルメニアの歴史叙述の最大の権威たる「文人の父」^{ケルトガハイル}ホレンのモヴセスによって行なわれた。この『歴史』が表しているのは、マケドニアのアレクサンドロスの神秘的な生涯、ペルシア人たちに対して [彼が] 推し進めた長期の戦争、建設的・文化的な諸々の活動の芸術的な描写であり、それらの目的は、全能にして義なる英雄の理想的形姿を創造することである。その翻訳は、アルメニアの国家の復興という考えと、過去の英雄的な例によって同時代人たちを鼓舞するという必要とに結びついて、5世紀のアルメニアの現実の緊急な必要の反響を表している。この状況のおかげで、アレクサンドロスの歴史のアルメニア語訳は、その時代の [歴史記述の上に] だけでなく、のちのすべてのアルメニアの歴史 [記述] の上に、相当の影響を及ぼした。13世紀まで、その影響と普及

とは文学的な圏内に限られていた。

アレクサンドロスの『歴史』のアルメニア語訳の新たな生は、13～14世紀に始まった。当時この『歴史』は、本質的な変化を蒙ることによって、民衆的な大衆の環境へと浸透し、彼らが読む或いは聞くことを最も好んだ書物の1つとなったのである。この作業を企て、その仕事を実現したのは、13～14世紀のアルメニアの詩人ハチャトゥル・ケチャレツィである。彼が目指したのは、この古い小説の現代化であり、その異教的精神を和らげることであり、[それを]キリスト教的な道徳性の諸観念と和解させることである。そのような目的のもと、民衆の広範な範囲が『歴史』にアクセスできるようにするために、彼は、本文上の挿入的な付加（アルメニアの中世の詩の中で非常に普及した韻文の韻律の中の、「アルメニア語の韻律」によって書かれたカファ）を多数行なった。ケチャレツィの仕事は16世紀に、グリゴル・アグタマルツィとザカリア・グヌーネツィが続けた。実際、基本的にこれら3人の著者たちの努力のおかげで、アレクサンドロスの歴史の独自のアルメニア版が成立したのであり、そのことは、地方的・国民的ないくつかの特徴によって明白である。アレクサンドロスの『歴史』のアルメニア語訳の普及については、次の事実によってだけでも、考えを成すことが可能である。すなわち、我々に伝わった写本の書写の数は70を超えているのである。それらの一部は戦闘の光景を描いた多色の絵で飾られており、それらはアルメニアの世俗文学の極めて芸術的な事例の中に含まれる。

それについて次のような事実が存在する。すなわち、中世にはアレクサンドロスの『歴史』は口伝によっても普及し、口伝の歴史の基礎の上に記された写本すら保存されているのである。『歴史』自体に加えて、アルメニアの現実の中では、アレクサンドロスについて織り成された、翻訳または自国[産]の多数の伝説・物語が、流布している。

『銅の町』や『乙女と若者』や『パフル王の物語』もまた、文学的な彫琢と大衆化との同じく長期の過程を経ている。これらはその起源によって、アラビアの有名な『千一夜』物語と結びつけられている。極めて貴重な或る写本情報によると、これら物語の最初の2つは、タイクの王子ダヴィト・クロパラテスの指示によってアラビア語からアルメニア語に10世紀末に訳された。続く諸世紀にはそれら本文は、新たな章句や特に韻文の挿入箇所によって豊富化されて——こういった箇所の創造の仕事には、多くの人々の考えでは、13世紀のアルメニアの有名な詩人フリクもまた、彼自身の関与を担っている——、本質的な編集的変更を蒙った。中世の末には、『銅の町』や『パフル王』や『乙女と若者』の物語の様々な版や編集は、数多くの書写によって、また古い印刷の出版によって、流布した。この現象が示しているのは、それら綺談はその冒険譚的な内容によって、機知に富んだ展開によって、そして幻想的な世界の魅惑によって、アルメニアの読者の芸術的欲求に対して或る程度満足をもたらした、ということである。

アルメニアの翻訳文学の領域の中では教訓的・道徳教育的な著作は充分広範な仕方で登場している。アルメニアの翻訳散文、及び一般に旧世界の芸術的文学の最良の範例の中に含まれるのは、賢者アヒカルの物語である。これは紀元前一千年紀の半ばごろにアラム語話者の環境の中で創造され、そしてその影響はイソップ寓話や聖書の道徳的・教訓的な諸書の上にすら認められる。アヒカルの物語は5世紀にシリア語版からアルメニア語に翻訳され、アルメニア人民の読書によって最も好まれかつ普及した書物の中の1つである。アルメニアの環境の中では、この物語は顕著な変化を経験して、一連の諸版を生み出しており、それらは数百の写本の中に書かれている。このような人気は、この物語が極めて興味深い内容を持っているということによって説明される。

アッシリアのセナケリブ王の助言者アヒカルは、嫡子がないので、ナタンという名の自分の甥を養子にし、彼に必要な教育を与えたあと、自分の地位を委ねる。しかしながらナタンは、自

分のおじがもたらした恩恵を忘れ、王の前で重大な告発によって彼を告発する。アヒカルは死罪を宣告されるが、或る忠実な家来の助けによって罰から逃れて身を隠す。しばらくののち、エジプトの王がナタンに数々の難しい問題を示す（それらが解けない状況においては、アッシリアはエジプトへの貢納支払者となる）。ナタンは正確な答えを与えることができず、そしてセナケリブ王は後悔と共に自らの賢者たる助言者〔アヒカル〕を想起し、彼の喪失を嘆く。その時に家来は王にアヒカルの秘密を知らしめる。王は喜んで自分の助言者に会い、そしてエジプトに遣わす。アヒカルはファラオによって示された問題を巧妙に解き、勝利のうちに帰還する。彼は自分の以前の諸々の栄誉と富とを再び得る。ナタンはアヒカルの慈悲に委ねられ、彼から痛烈な譴責を受ける。

この物語は2つの長大な一連の勧告によって中断されており、そのうちの最初の勧告は、ナタンの養育と教育の段階で示されている。ここでアヒカルは、様々な誘惑や悪行に警戒させることによって、自分の甥に人生の知恵を遺贈している。例えば「我が子よ、賢い者と共に石を運ぶことは、悪口を言う者や愚かな者と同席して酒を飲むよりも良い」、或いは「我が子よ、他の人々がお前について良いことどもを言うようになるよう、誰についても悪しきことを言うな」、等々。第2の一連の勧告は、ナタンの処罰のエピソードに続いており、恩知らずに対する叱責へと向けられている。例えば「我が子よ、お前は私に対して、陶器師の炉に入って、それが暖まった時に彼に対して吠え始めた犬のようだった」、或いは「我が子よ、私は神と人々の前でお前を高くし、お前は、お前に恩恵を与えた者に害悪をもたらした」、等々。

ペルシア王ホスロフ・アヌーシルヴァンの名で知られる一連の勧告（13世紀にアルメニア語に翻訳された）もまた、同じ種類の文学的著作の中に含まれる。文学的関係の観点から見て、『ヌーシルヴァンの勧告』の本文が、アルメニア語に翻訳される前、またその後にも、通っていった道は興味深い。この著作はペルシア語で6世紀に著され、9世紀にアラビア語に翻訳され、[英訳ではここに「10世紀にアラビア語から近世ペルシア語に再び翻訳され、」という表現が入る] 13世紀にペルシア語からアルメニア語に翻訳され、そして18世紀にアルメニア語から、アルメニア文字で書かれたトルコ語に翻訳された。『アヒカルの勧告』と同様、『ヌーシルヴァンの勧告』もまた、中世のアルメニアの中で広範な普及を見、様々な編集や版が数十の写本によって書写された。それらの中では、封建国家的な社会の社会的・日常的な諸関係や、道徳的な標準・観念が、独特な表現を見いだしており、それらはアルメニアの読者にとって全く理解・受容が可能である。そして、それらがアルメニアの中世の教訓的な詩の中に——例えば、ハチャトゥル・ケチャレツィやヨヴハンネス・エルズンカツィやナガシュ・ホヴナタンの詩の中に——若干の反響を見いだしているのは、偶然でない。

アルメニアの翻訳文学の別の古い著作である、『哲学者たちの言葉』というタイトルを担った簡潔な集成もまた、その性格から見て、教訓的著作の列に分類される。そこに集められているのは、旧世界の偉大な思索家たちの勧め、『羽根のついた言葉』、簡潔な金言、また時には風変わりな話や面白い物語である。名指しで言及されているのはピタゴラス、デモクリテス〔デモクリトスが正か〕、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、デモステネス、ディオゲネス、そして他の多くの哲学者や弁論家である。集成の素材は次のように分類されている。すなわち、知恵、教育、友情、力、勇敢さ、貪欲、栄光、沈黙、醜態その他である。以下が、「知恵」という素材を照らし出す物語の中の1つのサンプルである。「エンペドクレスは言った、『1人の賢い人を[も]私は見つけなかった』。彼らは彼に言った、『賢い人を探す人は、先に自分が賢くなければならない』」。次の勧めは『富』という素材を提示している。「ソクラテスは言った、『富を持っていてそ

れを享受できない人を軽蔑せよ。なぜなら彼は、馬を持っていて地面を耕せない人々のようだからだ』。生と死の問いを惹起する次の知恵もまた、極度に正確でかつ美しい。「アリストテレスは言った、『飢えてもなければ満腹してもおらず、喉が渴いてもいなければ満ち足りてもいない、そういう状態で食事部屋から去らねばならない、そのごとくに、[我々は] 地上の生から去らねばならない』。これら若干のサンプルは、『哲学者たちの言葉』という集成がどのような大きな芸術的満足の中世のアルメニアの読者にもたらすことができたかを、思い描かせることができる。

中世のアルメニアでは寓話的な種類の著作の翻訳も同程度に流布しており、それらのうち最も古いものとみなされているのは『教訓集』という集成である。寓話や物語のこの集成はキリスト紀元の最初の諸世紀にエジプトのアレクサンドリア市で書かれた、と推測されている。その数多くの古い翻訳——ラテン語、シリア語、コプト語、アルメニア語、エチオピア語、アラビア語、そして他の諸言語による——もまた知られている。中世後期にはこの集成は、翻訳され様々な国々の中で繰り返し刊行されることによって、ヨーロッパの中でも広範な普及を見いだしている。基本的に『教訓集』は実際のまた想像上の動物たちの様々な習慣や様々な特徴の描写を示しており、それらに付け加えられているのが、道徳教育的性格を帯びた寓意的な註釈である。例えば「この物語が示しているのは、敵の助言には警戒しなければならない、ということである」、或いは「サタンも追従的な相貌によって多くの人々を滅ぼす」、等々。『教訓集』は、アルメニアの中世の文学に対して、またアルメニアの建築に対してすら、例えば教会の装飾の動物的絵画に役立つことによって、大きな影響を及ぼしている、ということが知られている。

イソップ寓話も様々な経路によって古い時代以来アルメニアに浸透しているが、しかしながらアルメニアの文学の中では、その名前ではいかなる集成も知られていない。ギリシア流学派の一連のアルメニア翻訳には、オリュンピアノスの名を担った或る寓話集が存在した——もっとも、諸々の研究が示しているように、その集成は全体としてイソップ寓話から成っているのだが。そして、ギリシアの文学ではこれまでのところ「オリュンピアノスの名を担った」そのような集成は発見されていないので、推測されているのは、それら寓話は集められ、弁論家オリュンピアノスの弁論術的著作のうちの1つから切り離されたのだ（その中でそれら寓話は、弁論術的なくかくしかじかの規則を説明する例として出てきていたのだ）、ということである。『教訓集』と同様、オリュンピアノスの集成もアルメニアの寓話文学の上に深い足跡を残している。ヴァルダン・アイゲクツィの名で知られる『アグヴェサギルク』の中にはこの集成に由来する数多くの寓話が存在する。

『アグヴェサギルク』の中には、東洋の最も有名な文学作品の1つである『カリラとディムナ』の寓話もまた、若干の場所を見いだしているが、しかしながらその「すなわち『カリラとディムナ』の」アルメニア語での、中世での完全な翻訳は知られていない。その充分詳細な版は——『皇帝フォンティアノス或いは7人の哲学者たちの物語』というタイトルで——、比較的遅い時期にアルメニアの現実の中に浸透した。たぶん『カリラとディムナ』の西洋の様々な版の1つが、ラテン語からアルメニア語に1614年にヤコブ・トカテツィによって翻訳されたものだろう。しかしながら、これほど遅い翻訳であるにもかかわらず、その著作は、短い時間の間にアルメニア社会の中で広範な受容を見いだした。この物語の数多くの写本の書写は17～18世紀に書かれて我々に伝わっており、1693年から1857年までの期間に10以上の刊行が行なわれており、アルメニア文字やアラビア文字でのそのトルコ語訳もまた行なわれている。我々が、碩学たるアルメニアの文献学者N・アキニアンが指摘しているように、「世界の文学の中で、聖書に次いで『7人の哲学者たちの物語』ほどに拡大と大衆化を見いだした書物は存在しない」という状況を念頭に置くので

あれば、このような受容は驚嘆の念を惹起するべきでない。

アルメニアの翻訳文学の中で世俗的な性格を担った一連の著作には、韻文の作品もまた存在する。それらのうちで最も有名なのは、14世紀にカタロニアで書かれ中世のヨーロッパで非常に普及した騎士的なロマンスの1つである『パリとヴィエンナの物語』である。1487年にはフランス語訳が刊行され、これがさらなる諸々の翻訳の基礎となった。15世紀末に、また16世紀全体に、このロマンスの数多くの刊行がヨーロッパのさまざまな言語で行なわれている。アルメニア語訳は1587年にマルセイユで、アルメニアの出版業の功労者ヨヴハンネス・テルズンツィによって行なわれている。推測されるのは、この物語のイタリア語の韻文翻案の1つがアルメニア語訳のために例となった、ということである。

このロマンスの大いなる流布及び大衆化は、その深い感情的性格によって、また、芸術的に高い質によって、説明される。詩の形で、ラヴ・ストーリーは社会的不平等——主人と家来の関係という条件——の中で展開している。最後に、真摯で献身的な愛の前にはあらゆる悪も妨げも無力であるという、教訓的な知恵が確認される。敬うべき主人の娘とふつうの騎士パリの恋は、あらゆる種類の試練や妨げに抗して、最後には勝利する。見たところ明らかに、そのアルメニア語版によれば、東洋の諸国——シリア、エジプト、メソポタミア、ペルシア——を放浪する間に、さまよえる騎士がアルメニアをも訪れ、またアニ市が見いだされるという状況もまた、アルメニアの現実の中でこのロマンスの流布を促進した。

保存されている書写の巨大な数から判断して、中世のアルメニアの読者が愛好した著作の中には『父たちの生涯』や『命の鏡』の翻訳的集成も含まれる。それらは道德教育的な目的を目指していたものの、しかしながら、その含んでいる面白い物語や小説同様の物語のおかげで、読者たちの芸術的ニーズをも満たしていた。

『父たちの生涯』という集成は4～5世紀にエジプトの隠者たちの環境の中で編纂され、そののち翻訳によってキリスト教世界全体の中に流布した。この集成のギリシア語版、ラテン語版、エチオピア語版、シリア語版、アラビア語版、アルメニア語版が知られている。アルメニア語版は2つの編集で、或いは言うなれば、古い翻訳と第2の翻訳とによって、我々に伝わっている。最初の編集は12世紀の末に、キリキアのアルメニア文学の有名な人物の1人であるネルセス・ランブロナツィが、この集成の様々な部分の古い翻訳を合わせることによって行なった。第2の編集は同様にキリキアでほぼ2世紀後に行なわれた。こちらは多数の新たな素材の追加によって、また、[第1の編集と] 比べて一層規則的な構成によって、顕著なものとなった。この集成の物語は内容に応じて、[すなわちエジプトの] 砂漠の道德律の基本的な諸原理——謙遜、貪欲の否定、節制、ホスピタリティー [或いは異国愛すなわち離郷?]、忍耐、その他諸々の徳——に従って、編纂されている。次のものは、ふさわしくない行為に対する叱責を示す物語の中に含まれている1つのサンプルである。「或る人が或る老人と共に暮らしており、食事の時いつも足を食卓の上に置いていた。老人は彼を叱らなかつた。長い時間が経ち、その老人は敬われている別の人のもとに行き、彼の出来事を物語った。この人は彼に言った、『その兄弟を私のもとに送りなさい』。老人もそのようにした。そして、その兄弟が彼のもとにやって来て食事の時に食卓が準備されると、老師は速やかに両足を食卓の上に置いた。訪問者は不快になり、我慢できずに言った、『父よ、そのようなことをすることはできません』。老師は両足を下に下ろして言った、『あなたの言うことは正しい、兄弟よ。これは大きな罪だ。私は神の前に罪を犯した』。その兄弟は老人のもとに帰り、もう決してその不適切な行為を行なわなかつた。」

『命の鏡』という集成の物語はより興味深くかつ楽しい。それら物語は、道德的・教訓的目的

のためにだが、大部分、世俗的生活のエピソードをめぐって織り成されている。この集成のラテン語底本は1480年に書かれた。1605年にベルギーの文人ヨハネス・マヨルが、『大きな鏡』というタイトルを与えることによって、この集成を相当程度拡張・再編集している。1612年には『大きな鏡』のポーランド語訳が刊行され、そして17世紀の終わりにはロシア語訳が刊行された。上で言及されたように、アルメニア語訳は、17世紀半ばにポーランド語版の基礎の上に、ステパノス・レハツィによって行なわれた。この集成のアルメニア語版は他の諸訳に比較して相当短く、全部で247の物語を含んでいる。『父たちの生涯』という集成におけるのと同様、物語は内容に応じて、様々な章に区分されている。嘲笑や批判の物語の中には、社会の様々な階層——聖職者たちや富める者たちや金貸したち——の振る舞いの悪しき諸側面が示されている。例えば、貪欲さという素材の下に含まれている物語のうちの1つでは、次のことが語られている。「昔の王たちの貨幣を多く持っていた或る人が病気になり、病院に行き、そこにおいて人々は彼自身を受け入れた。貪欲のゆえに彼は長い間、自分が持っており積み上げた銀を隠していた。しかし病気だったので、彼は、穀を取った小麦を自分のために煮てくれるよう、大いに嘆願し懇願した。そして人々が持ってきた時、彼はベッドの中で横になって、パンの代わりにそれら古い銀貨を入れ、大変な食欲で奮起してそれらを食べた。そのあと直ちに彼は喉を詰まらせた」。次のものも、祈りへの愛を示した章からの面白い物語である。「聖性を愛し神によるこばれている或る説教者が、いのちを与える言葉を蒔くという目的で、ろばであちこちを回っていた。或る日、祈るために彼は教会に入り、ろばを教会の戸の前につないだ。しかし彼は、『父よ、私は罪を犯しました』と [いう祈りの言葉を]言うや否や、人々がろばを盗んだかもしれないということを何度か思った。このような他の諸々の考えも彼自身を祈りからそらした。こう感じて、彼はすぐに教会から外に行って、今後祈りの時にその問題が彼自身の心を占めることがないよう、そして彼自身が神から離れ去ることがないよう、相応な価格でろばを売った」。

アルメニアの古代・中世の翻訳の歴史文化的な価値の評価のために提示されたこの短い瞥見から、次のことを思い描くことができる。すなわち、アルメニア人民の知的な経験の中で、翻訳はいかに重要な役割を有したことか、そしてアルメニアの中でそれら翻訳はどれほど、世界の学問に、芸術や文学の達成の普及に、促進的に作用したか、そして自国の文化の勃興と発展のために土壌を準備したか。翻訳の作業は一般に、特にアルメニアの文化の興隆と開花の時期——アルメニア人民の精神生活が、その増大するニーズと関心とを満足させる目的で、新たなかつ豊かな源泉と養分とに対する必要を感じた時——には、大きな拡大を見せているのである。